
人を想う夢のように

ちよく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人を想う夢のように

【Nコード】

N77950

【作者名】

ちよく

【あらすじ】

生と死の境目あたり。そこへ自ら赴くとき、ラプターと名乗る一人の青年が現れた。

そんな人たちを描いた短い物語。

要は自殺を望む人とラプターくんのお話。

ひとつ目（前書き）

『死を想う』ということをお自分なりに、比較的明るく描いていきます。

一話完結の短編集として連載していきますのであしからず。

『死』などの言葉を多用しますので、苦手な方はご注意ください。
それと、十を一 など漢数字を使ってアラビア数字流に表記します。

ひとつ目

人を想う夢のように 一つ目

鳥瞰

悪くないな。ガラスの破片が残っていた窓に腰掛けて思う。死ぬ前に特に何を見たいわけでもないが、やはり悪いよりかはいい眺めで死にたい。

廃ビルの下には果てしなくコンクリートが広がる。これを見てみると、人類によって世界中の地面という地面がコンクリートで覆われているような気もしてくる。

死ぬ。今までに何通りか死ぬ方法を考えてみたが、思いつく中でもっとも安易で苦痛無く死ぬする方法が飛び降りだった。

薬による安楽死がベストだが、それに用いられるであろうメジャーな薬物、睡眠薬は最近では安全になっているらしく、そう簡単には死ねないらしい。

それからいくつかの方法を検討した結果、行き着いたのが飛び降り自殺。頭から落ちれば一瞬だ。

「もしもし。」

ふと、背後から声をかけられる。背筋が凍った。誰だ。

「もしかして、死ぬんですか？」

背後にいた少し年上、二歳過ぎくらいに見える細身でメガネの男が言う。

「……………」

何も言わず、男をじっと見つめる。

「あってます？」

男が微笑みながら首を傾げた。

「あっていたら？」

「へーそんな声なんだ。」

ふざけるな。質問しておいて、こっちが対応したら話題を変えるな。

「……………」

「いやいや。ゴメンゴメン。でも残念だけど、冗談じゃないよね？」

「…何が。」

「キミが、今から死ぬ。ってこと。」

「あんたには関係ない。」

「いやいや。大アリだよ。だってキミが死んじやったら、俺は捕まっちゃうでしょ？」

「助けられなかった。って言えば良い。」

「ほら。やっぱり死ぬつもりなんだ。」

「……………」

何なんだこいつは。

屋内に吹き込む強風の音以外、場は静寂だった。

「……何がしたい。」

こう着にしびれを切らし、口を開く。

「何って？」

男は数歩近づいて、おどけながら聞き返した。

「何の用があって話しかけた。」

「別に何も？キミが死にたいなら死ねばいいよ。俺はただ、キミがそこに座ったままずっと動かないから、死なないのかなーって。」

「……………」

「それだけ。」

死ぬタイミングくらい個人の自由だろ。と言おうと思ったが、この男にはそんなこと言ってもムダだと思った。口を閉ざして遠くに映える摩天楼群に視線を戻す。

「……まあいいや。まだ死なないならさ、ちょっとお喋りしようよ。」

男の口調が変わった。

「……………」

「つれないなー。俺の名前はさ、」

「言わなくて良い。」

さえぎった。相手のことを知ると情が湧く。気持ちが乱される。今はただ落ち着いて、何事も無いように、平常心で、息をするように堕ちていくことを望んでいるのに、それは全く無意味なことだ。が、聞こえてしまった。心の底から怒りが湧く。

「女みたいな名前でしょ？」

知るか。

「そうだな。ラプターって呼んで。」

「……………」どうして。」

「名前を解釈すると、夢が叶うって意味じゃん？英語の夢心地って意味のRaptからとって、ラプター。」

「違う。」

どうして今から死ぬ人間に名前を教えて、さらに呼び方まで指定するんだ。

「違うくないよ。で？キミの名前は？」

「……………」

「よし、じゃあ分かった。今から自殺するんだったら、遺書あるでしょ。どー？」

「……………」

「…じゃあなんて呼べばいいかだけでも教えてくれるかな。」

「お前、何が目的で名前なんか聞こうとする。」

「ラプターの方を向いて言う。背中に当たる風が冷たかった。」

「お友達だから。」

「ふざけるな。言え。お前はどのように、何が目的でここにいる。」

「……自殺かな。」

「は？」

「自殺だよ。キミ、一昨日そこに座れるように、窓枠に残ってたガラス砕いたでしょ？」

「あ…ああ……」

確かに、一昨日この場所を見つけて、来るべき今日の為に窓枠に残っていたガラスを砕いて準備をしていた。

「実は俺もちよつと前から、そこ狙っててね。一昨日来てみたら碎いてあったから、もしかして俺の他にもここから飛び降りる人がいるのかなってね。」

「どうして見つけてすぐ飛び降りなかった。」

「キツイ見幕でラプターを睨む。」

「それはキミにも言えることじゃない。」

「それは……」

「言い返せない。唇を噛んだ。」

「分かってるよ。ちゃんと理由がある。」

「……………」

「まあ、死ぬなんてそんなモノだよ。気にしなくていい。人には人の死ぬタイミングがある。ただ、俺はこの三日間キミに合いたいと思っていた。って言うのが本心かな。」

「…死ぬのか？」

死を決意した者に何か生きて達成するべき目的が芽生えたと、そ

の決意は急速に脆くなる。自分自身でも理解していることだった。
「いつかはね。」

「ここから飛び降りて？」

「願わくは。」

花の下で春死なむ。花というより廃ビルだ。

「そうか……」

「……でさ、キミを待ってて俺思ったんだけど、生きてれば何か良いことあるよ？」

「良いことが無かったから死ぬんだ。」

「ははっそれもそうだね」

ラプターは心をかき乱す。

「……もう一度聞く。お前、何が目的だ。」

「言っただでしょ？目的は自殺。でも目当てはキミかな。今日のところね。」

「……明日は。」

「明日はキミが居ないでしょ？そしたら、ここに来る理由は自殺一つになっちゃうね。」

「死ぬんじゃなかったのか。」

「死ぬよ？いつかはね。」

「なぜ引き止める。」

「別に引き止めてはいないよ。じゃあ死ねば？」

「っ……………」

静寂の中で死にたいのに。

「ふう……………あのさ、も一回言っけど、別に死んでも良いこと無いと思うよ？」

「……………」

「ね？」

「死んだこと無い奴が言うな。」

「まーねーそれもそうか。」

静寂。いや、風の音がビルにこだまする。

「……………」

「……死にたい？」

「……別に……………」

今は死にたくない。もっと静寂に包まれて、もっとゆっくりと死んでいきたい。

「じゃあ生きる？」

「……………」

「かたくなだね。そんなに死にたいの？」

「……お前がいなければ。」

「よっし。そっか。分かった。それじゃこれで手を打とう。」

背後で、冷たい金属音が響いた。

「……………」

絶句。

「俺がキミを殺して俺も死ぬ。どう？恋愛漫画に出てくる悲劇の恋人同士みたいでベタな展開じゃない？」

「ふざけるなっ……………」

刃渡りがーセンチ強はあるかと思えるサバイバルナイフがラプターの手のうちにあつた。刃が淡い金属光沢を放っている。それを見て歯を食いしばつた。もちろん、怒りをこらえるために。

「なんでー？いーじゃん。別に。死にたいんでしょ？」

ラプターが、一步、近づく。

「やめろっ来るなっ」

「どうしたの？死にたいんじゃないの？」

「……っ殺されたい訳じゃないっ」

そんな苦しそうな死に方、選んでない。

「いーの。世の中結果論。学校も仕事も博打も人生も、ぜーんぶ結果論で動いてる。」

「それはっ……それは客観的なものの見方だ。」

「そうだよ？俺からしたら、君の生き死になんて赤の他人事だもん。」

「……………」

「あ、そうそう。これね、あそこのホームセンターで買ったんだー」

と、ラプターが笑いながら窓の外を指差す。

一瞬、それにつられて視線を

「スキありっ！」

ラプターが目前に迫った。

「……………っ止めるっお前っ死にに來たんじゃなかったのかっ」

「後から、ちゃーんと死ぬから。」

「うるさいっ死ぬっ早くっ……………お前が先に死ぬば良いだろっ！！」

「……………ふふ。そっか。それもそーだね……………」

と、ラプターはサバイバルナイフを振るうこと無く横を通りすぎ、後ろの窓から身を乗り出した。いや、乗り出したと言うより半分飛び出したと言う方が正確かもしれない。

「……………っ待……………」

本能だった。本能的にラプターの服の裾を掴もうと、手を伸ばした。

「なーんちゃって。……………ってこの言葉、古かったかな？」

ラプターは身体を回転させこちらを振り向き、よっと。と言いながら曲がった身体を戻す反動を利用して、元からそこに立っていたかのように直立した。そして茫然としているところをラプターに押し倒される。

馬乗りになったラプターは、淡く光るサバイバルナイフを高々と持ち上げ、空いた手で首を床に押し付けてきた。

「……………っ」

「ははっさっきとは違って怖がってるね。スカートがこんなにはだけちゃってるのに、お構いなし？」

「や……めろっ……」

スカートが風になびく。

「白かー。俺、シマシマのが好きなんだけど　なっ……!」

ラプターが太ももに、サバイバルナイフを振り下ろした。

「うぐうつ……」

思っていた感覚とは違う。が、そこには確実に痛みがあり、痺れたような感覚が走る。スカート越しに、血のような赤い液体があたりを飛び散ったのが見えた。

「どう？痛い？」

「お……おまつえ何か死ねっ……早くっ……死ねえっ……!」
廃ビル全体に響ほどの大きな声で叫ぶ。

「ふふっじょーだん」

ラプターが赤く染まったナイフを目の前に持ち上げる。

「……………」

何が冗談なのか分からなかったが、ナイフを鈍く光らせる、赤い液体が頬に落ちるのは分かった。

「なんちゃって」

ラプターが首を押さえる自らの手に、そのナイフを振り下ろす。

「っ」

死んだ。

「ほらね。よくできてるでしょ？」

ラプターの声がする。混沌極まる意識の中、ゆっくりとまぶたを開けると、目の前でラプターがナイフの先端を押していた。刃が中に収納できる構造らしい。

「お前……」

「結構苦労したんだよ？中に血のり仕込んだり、ちゃんと痛いように刃先が少しだけ出るようにしたり、嘘っぱくならないように色々工夫したんだから。」

首を押えていた方の手の甲をラプターが見せる。切り傷があった。

「っ…………死ねっ！！今すぐそこから飛び降りろっ！！」

「やだなー言わなかったっけ？人には人の死ぬタイミングがあるって。」

「うるさいっ…………早くっ早く死ねっ！！」

「よしっじゃあ一緒に死のつか。」

と、ラプターに手を掴まれて引き起こされる。

「やめっ…止めろっ」

「死ぬんでしょ？」

「…………お前が死んだら。」

あと一歩で落ちるところまで来た。

「そっか。じゃ今日のところは死ぬの諦めて。」

「…………」

「いい？」

「……………何で」

「今日の目当てはキミに合うことだからね。君が死んだら、俺はここから飛び降りる。」

「…………っ」

「じゃあ一回死んでみる？」

「ひあっ」

ラプターに背中を押されて、踏み外した。

「よっと。」

ラプターに腕を掴まれて、廃ビルの中に戻る。

「……………」

「どう？怖かったでしょ？」

「……………死ね。」

「だから、キミが死んだらね。」

「…………お前が死んだら。」

「ラプターは、そっか。と笑って、

「じゃ、名前聞いても良いかな。」

「……………名前？」

「そう。キミの名前。」

「…………私は」

風のせいで自分でも聞こえなかった。いや、風の音にかき消されるほど声が小さかったのかも知れない。

これが、私とラプターの出会いだった。

ひとつ目（後書き）

いくぶん初投稿なので手際に戸惑ってしまいましたorz
原稿の時点で縦書きなので、横にした為に読みにくくなっていたか
もしれませんが、ご容赦ください。

それと読んでいただいて、ありがとうございました。

ふたつ目（前書き）

ひとつ目に引き続き。

前回よりも話が浅い…と読み返していて思いましたorz

ふたつ目

人を想う夢のように ふたつ目

喧騒

騒音を立てながら走る電車。ここに今から飛び込むつもりだ。と思っているのは自分でも不思議だ。

手段はいくらでもあると思う。飛び降りや首吊り、冬になれば凍死だってあるし、飛び込む予定の電車を乗り継げば海に行ける。溺死も悪くない。

しかし、今飛び込みを選んだのは、いつもの生活からなるべく離れたくないから。出来るだけ日常の中で死んでいきたいから。

身勝手な我が儘だ。

「もしもーし」

「え？」

ベンチの隣に座る、同じ年くらい、二歳過ぎくらいの茶髪で細身の男性に声をかけられた。

「電車、行っちゃいましたよ？」

「え、ええ…そうですね。」

「飛び込まなくて良かったんですか？」

「…え？」

何で知っている。

「あれ？もしかして違った？」

「……………何ですか？」

「そっか。死ぬんだ。」

「なっ…だから何で」

「電車、三本もスルーしてるし。」

「……………それだけでどうして」

「ボクにはね、分かるんだよ。」

訳が分からないまま、無情にも周囲の喧騒が少し大きくなった気がした。

「言っておきますけど、引き留めても無駄ですからね。」

「えー？キミに死なれたら俺、事情聴取とかされちゃうじゃん。」

「じゃあ死ぬ前にどこかへ行ってください。」

こんな方法を選んでおいて何だが、出来るだけ多くの人を巻き込みたくない。

「そつか。そーだね、悪くないかも。」

到着予定が表示されている電光掲示板を見ながら、笑って言った。

「……………終電の一本前で飛び込みますから、早くどこかへ行ってください。」

「それまでに、まだ二本あるよ？」

「いいから…早く」

「そーだよ誰かとしやべってると、死にづらくなるもんね。」

「そんなこと」

あるかもしれない。

ホームに次の電車が到着するアナウンスが入った。

「一つ聞いていいかな？」

男が黄色い線の内側に列を作る人達を見ながら口を開いた。

「……………」

「キミ、名前は？」

「何で教える必要があるんですか？」

「…ダメ？」

「……………」

これから死ぬのに、何故名前を言う必要がある。

「あ、自殺するんでしょ？遺書とか持っていないの？」

「……………」

「…そっか。じゃ、俺から名乗るよ。俺の名前は」

電車がホームに滑り込む音でかき消された。

「ラプターって呼んでね。」

「だってほら、俺の名前って夢が叶うって意味でしょ？それにちなんで夢心地って意味の英語、R a p tからとって、ラプター。」

「違います。」

これから死ぬのに、呼び方なんて必要ない。

電車が騒音を立てながら、喧騒を連れ去っていった。

「違うくないよー」

「言おうとしての意味分かってます？」

悪いけど、死ぬ前にこんなに熱く語りたく無い。

「知ってるよ。死ぬ人に呼び方教えたってムダだもんね。」

「…引き止めようとしてるんですか？言っておきますけど」

「知ってるよ。死ぬんでしょ？死にたいんだったら死ねば？」

「じゃあ何で名前なんか」

「お友達だからかな」

「は？」

急に何を言い出す。さつき初めて会ったのにお友達だなんて言われても

「お友達。実は俺も自殺志願者なんだよね。」

ラプターは笑って言った。

「…死ぬんですか？」

「そのうちね。」

「どうやって？」

「飛び降りかな？」

「飛び込みじゃなくて？」

「そ。飛び降り。」

「……そうですか。」

「一つ向こうのホームに電車が入ってきた。」

「で、キミは次の次の電車に飛び込んで死ぬんだよね？」

「…予定では。」

「そっか。もし望むなら、俺も付き合うよ？」

「え？」

「飛び降りて死ぬんじゃないかったのか？」

「ただ困ったことに、俺が死ぬと、ある一人の少女が自殺することになってる。けどまあこの際どーでもいいっか。」

「は？」

「ラプターが死ぬと少女が自殺する？」

「大丈夫だよ。キミが死ぬのには何も関係ないから。」

「……けっこうです。」

「…そっか。」

「…ねえ」

「一つ向こうのホームを出ていく電車を見ながら、ラプターが口を開く。」

「なんですか」

「死に向けて出来ればそつとしておいて欲しい。」

「もうすぐ次の電車来るね。」

「ええそうですね。」

「ところでさ、何で終電のひとつ前の電車にしたの？」

「…終電の一つ前なら、人が少ないと思ったからです。」

「そっか。でもさ、今も人がかなり少ないよ？」

「確かに、人はまばらで飛び込んだら助けられる距離にはラプターしかない。」

「どうする？人が少ない時に死にたいんだったら、今がチャンスだよ？」

「え？」

確かにそれはそうだが

「それに、終電の一つ前なら人が少ないって保証もないしね。」

「……それは」

突然、ラプターに強く手を引かれて黄色い線まで来た。

「ちよつと何を」

「死ぬんでしょ？俺が押してあげようか？」

ラプターが耳元で囁いた。

「な」

「死にたくない？」

死にたい。しかし

「殺されたくはないです。」

「変わらないよ。」

背中 of ラプターの手にし少し力が入った。

「なんでこんな」

「さあ？気持ちは分かるからさ。ちよつとした人助け。」

人助け？世の中には変わった人助けがあるものだ。

「だから殺されたくは」

「だから 変わらない。キミは死ぬ。それだけ。」

「それは客観的な見解で、死に方は主観で」

「そーだね。客観だよ。だって俺からしたらキミは赤の他人。死ぬも生きるも関係ない。」

「そんな無責任な……」

「じゃあ俺も一緒に死のうか？」

「……」

何故だ。人を殺そうとした挙句、その対象に二つの命を委ねる。

「おっと。ほら、もうすぐ時間だ。」

ラプターが電車の到着予定時刻を表示する電光掲示板を指さして言った。

それにつられて指さす方向を

「スキあり！」

刹那、身体が宙に投げ出された。

「え　？」

数秒後には砂利の上に横たわっていた。

「ほら。」

と、降りてきたラプターに手を引かれてホームの下にある避難用の空洞に入った。

「どうして……」

「だって多分飛び込むより、電車が来る瞬間に下に滑り込む方が死亡率高いよ？」

「監視カメラを見て誰かが　」

上から、もうすぐ次の電車が来るというアナウンスが聞こえてくる。「大丈夫。来ないよ。このご時世、日永一日監視カメラを見てるだけなんて、そんな人件費のかかることやってないだろうしね。俺の推測だけど。」

「じゃあもし誰か来たらどうするんです。」

「その前に電車が来るだろうね。」

ラプターが笑いながら言った。

「……………」

次の電車で決めると言う訳か。線路の彼方に光が見える。

「死にたい？」

「　どちらかと言えば。」

「そっか。」

それきり、しばらく無言が続いた。

「……あ、そういえば。」

どうしようか考えている所で、ラプターが口を開いた。

「……なんですか。」

「どれかは忘れちゃったけど、どれかの線路、高圧電流が流れてるから気を付けてね。」

「死ぬ人間に言うことじゃないですね。」

「上手く死ぬるように、おまじない。」

「……ありがとうございます。」

何故礼を言っているんだ。

「あ、来たよ。」

「聞きますけど、死ぬんですか？」

「いつかはね。」

「電車に轢かれて？」

「キミが望めば。」

「……分かりました。」

覚悟を決める。人生最大の決断をした。

「一緒に死にましょう。」

「へー……………」

ラプターの顔に不審な表情が浮かぶ。

「……何ですか。」

「いや……キミって見かけによらず大胆なこと言っないって、予想通りだったからちょっと面喰っちゃって。」

目の前のレールが震えている。

「……怖いですか？」

「人並みにはね。恐怖してるよ。」

「……………」

その割には平然と言ってるのける。

しかし、ラプターは恐怖していると言った。

「怖いかい？」

「…何度も聞かないでください。」

自身が死ぬことについて異論はない。

が、今は違う。曲がりなりにも二つの命を背負っている。何度も聞かれると覚悟が揺らいでしまう気がした。

「…じゃさ、どっちが先に死ぬか、決めよっか。」

「え？」

「流石に同時につてのはムリでしょ。」

「そう…ですね。」

言われてみれば、同じ所に同時に飛び込んで同時に死ぬのには、ムリがある気がする。電車は大体一メートル先まで迫っていた。どうする？」

ラプターが急かす。

「え…ええと…」

「…じゃあ、俺が電車で身体を轢き千切られて死ぬのを見てから死ぬ自信があるなら後。ないなら先。」

「え…え？」

この急ぐときにそんなこと言われても困る。

「もう一度聞くよ？俺が轢き千切られて」

「分かりましたっ先に死にます。」

そう何度も轢き千切られてと言われると、流石に後から死ねない気もしてくる。覚悟しているものの、リアルな表現をされると多少の焦りが出てきた。

そして、電車が目前に迫る。ブレーキ音が高く響くが、どうでも良い気がした。

「…来たね。」

ラプターが呟く。いつでも飛び出せるように、前傾姿勢になり、すぐ頭の上の、床であり天井でもある所に手を掛けて身体を支える。「押してあげようか？」

「…結構です。」

人が死のうとするその瞬間まで、その口調は変わらなかった。そして、電車がホームに滑り込む。

一両目の先頭の車輪が過ぎた瞬間、不意に身体が倒れる。

「え？」

視線の先には、ラプターの不審な笑みがあつた。

目の前を甲高いブレーキ音を立てながら電車が滑っていく。

「……………」

今この身がどんな状況に置かれているかの把握すら危うい状態だった。反射的に天井にかけていた手で持ちこたえていた。

「……………死ななかったね。」

ブレーキ音の中、ラプターの声が聞こえた。

咄嗟にラプターを睨み付けて言う。

「どうして押したんですか……………！！」

「いやぁ…魔が差しちゃってね。」

笑いながら言った。

「死ぬって言ったじゃないですか！！」

「じゃあ死ねば？」

「……………」

電車は既に減速して既に死ねる速度ではない。

「何で　　何で邪魔するんですか……………！！」

「……………生きていたら良いことが無いかも知れないし、あるかも知れないよ？」

「無かったから死ぬんです!!」

「でも死んでも良いことなんか無いよ。」

「生きてるよりマシです!!」

「何で？」

「それは……」

死んだことなど無いから分かるわけない。

「良いことが無いから死ぬってさ、悲しいよね。」

「……決めつけないでください。」

「だって最期まで良いこと無し的人生だよ？悲しいと思わない？」

「……」

最期まで良いこと無し。悲しい……というより悔しい気がしてきた。

その時、

「君たち!!大丈夫か!？」

駅員の人の声が聞こえた。

「気を付けて……ムリのしすぎは良くないからね。」

「……はい。」

あの後、こんな言い方はおかしいが駅員の人に線路から助けられて、話を聞かれた。過労で落ちたところに偶然自分が居合わせた。

という話をラプターがでつち上げ、最終電車に乗り込んで上手くその場から逃げることはできたが、納得がいかない。

「……」

「……怒ってる？」

電車に揺られながらラプターが言う。

「……別に」

「そっか良かった。」

乗り込んだ車両には他に誰も居なく、ラプターと二人きりだった。

「あのさ……」

「……何ですか」

「やっぱり良いこと無しで死ぬのは悲しいからさ、良いことがあったら死のう？」

「……………」

「……ね？」

ラプターが笑って言う。

「……………」

何も言わずに一つ頷いた。

「そっか。良かった。」

緊張が解け、疲れが出て寝てしまったのか、この後のことはよく覚えていない。

良いことがあったら死ぬ。

ラプターが言ったことを思い出し、夢の中で、それならもう少しだけ頑張ろうと思ったことを覚えているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7795o/>

人を想う夢のように

2010年11月9日00時55分発行